

千葉県における温泉地の地域的展開

—発達・現状と振興策—

山 村 順 次

1 はじめに

日本人の観光行動において、温泉志向性が著しく高いことは疑いない。日本観光協会の資料¹⁾によると、観光客の旅先での行動は「温泉浴」と「自然の風景を見る」が常に他を引き離しているが、1999（平成 11）年以降では「温泉浴」が 50%（複数回答）を超えていてトップの座を占めている。

こうした中であって、千葉県外からの観光客にとどまらず、地元千葉県民からも「千葉県は温泉県ではない」と言われ続けてきた。ここでの温泉県が何をさすかと言えば、湯煙を上げる高温で豊富な湧出量を有する温泉資源が多いことであろう。しかし、1948（昭和 23）年に制定された温泉法による温泉の定義²⁾は、①湧出地での温泉温度が 25℃以上であるか、②19 種類の成分のひとつを満足すればよいのである。一方、温泉利用の観点からは、温泉旅館の収容定員や宿泊客数が多いことも、温泉県としての指標になる。

千葉県は火山地域ではなく、噴気をあげるような温泉は存在しない。しかし、明治・大正期にも温泉の存在が記されており、近年では温泉掘削技術が進んで各所で温泉開発が行なわれていて、低温のいわゆる冷鉱泉と呼ばれる温泉法上の温泉が数多く利用されているのである。同時に、千葉県は東京大都市圏の一翼を担う地域を構成しているので、経済活動は活発で日帰り温泉施設の増加は顕著であり、温泉利用客は宿泊・日帰りともに急増している。

筆者は、9 年前にすでにこうした千葉県の温泉開発に関する論文³⁾を発表したが、本稿では前稿での資料を活かしつつ、最近のデータを加えて千葉県における温泉地の地域的展開をまとめ、温泉地の地域的特性を活かした振興策を提示することにしたい。

2 千葉県の温泉資源の全国的地位

環境省の 2006 年度都道府県別温泉利用状況⁴⁾によれば、千葉県の源泉総数は 151 本で 47 都道府県のうち 37 位、毎分温泉湧出量は 1.2 万ℓで 40 位である。一方、千葉県が東京都に隣接しているという好立地条件を反映して、温泉宿泊施設収容定員は 3.6 万人で 15 位、その宿泊客数は 240 万人で 21 位となり、上位にランクされている。東北地方の有力な温泉県である秋田県の温泉湧出量は 9.2 万ℓで千葉県の 7.7 倍もあるが、宿泊客数は 210 万人で千葉県に抜かれているのである。

ここで、高度経済成長期の 1972 年度における資料⁵⁾を見ると、全国的には温泉湧出量は現在の半分程度であった。秋田県の温泉湧出量は毎分 1.9 万ℓで現在の約 5 分の 1、千葉県は 0.2 万ℓで 6 分の 1 であり、現在に比べていずれも温泉湧出量は著しく少なかった。一方、1972 年の温泉宿泊施設収容定員は、秋田県は 1.9 万人、千葉県は 0.4 万人、宿泊客数はそれぞれ 210 万人、40 万人であり、

宿泊稼働率はいずれも 29%であった。2006 年度の宿泊客数では、秋田県が 34 年前と同じであるのに対し、千葉県は 6 倍を数えている。千葉県における温泉宿泊業の発展が、いかに著しかったかがうかがえる。

温泉資源性を評価する際に、毎分温泉湧出量 (ℓ/min.)、42℃以上の高温源泉率、温泉資源指数 (宿泊収容定員あたり温泉湧出量) ⁶⁾ などが指標となるが、こうした視点から 2006 年度の都道府県別温泉資源を位置づけると表 1 のようになる。

表 1 都道府県別温泉資源の特性 (2006 年)

温度 湧出量	高温源泉率 (42℃以上)						
	≥60%	50~60	40~50	30~40	20~30	10~20	10%>
≥10 万 ℓ/min.	C 北海道 A 青森 A 岩手 F 静岡 A 大分 A 鹿児島	E 長野 A 熊本					
5~10 万	A 秋田	D 山形 E 福島 E 栃木	E 群馬	E 新潟 C 岐阜	C 山梨 C 三重 D 和歌山	E 兵庫	
3~5 万	F 宮城	F 神奈川	C 富山	F 石川	A 大阪 A 福岡		
1~3 万	E 鳥取	D 長崎	B 宮崎	C 佐賀	A 東京	D 埼玉 E 愛知 C 京都 C 奈良 B 島根	A 茨城 F 千葉 C 岡山 A 広島 D 山口 E 香川 D 愛媛
1 万>				F 福井	E 沖縄		E 滋賀 D 徳島 F 高知

(注) 環境省の資料により筆者作成。枠内の県名は北から南へ配列している。

温泉資源指数 A : 3.0 以上 B : 2.5~3.0 C : 2.0~2.5 D : 1.5~2.0 E : 1.0~1.5 F : 1.0 未満

千葉県は毎分温泉湧出量・高温源泉率ともに全国的に低く、さらに温泉資源指数をみても最下位の F ランクである。温泉資源の少ない埼玉県と比べても、温泉資源指数で差をつけられている。これは、まさに温泉宿泊施設の規模が大きい千葉県の経営形態が反映されているのである。

3 温泉地の発達過程

(1) 第2次世界大戦前

明治初期の内務省衛生局編『日本鉱泉誌中巻』⁷⁾には、千葉県の上総国に湯ヶ嶽（望陀郡黄和田畑村、小櫃川源流部）、湯澤（周准郡市場村、小糸川上流鹿野山東麓）、下原（夷隅郡弥喜用村、夷隅川支流御宿北部）の3カ所、下総国に長堀鉱泉（印旛郡吉岡村）の1カ所、計4カ所の鉱泉が記載されている。

このうち、湯ヶ嶽鉱泉は光仁天皇の771（宝亀2）年に発見されたという歴史を有し、日蓮聖人がこの温泉で傷を癒したこと、館山城主里見義頼が温泉を城へ運んで湯治をしたこと、幕末の1840（天保元）年に領主松平大和守が温泉の成分を試験して効能があるとの結果を得て浴場を修築し、さらに1849（嘉永2）年には浴室と湯槽を新築して浴客が増加したことなどが記されている。鉱泉は華氏60度の塩類泉であり、「泉ハ湯ヶ嶽近傍ノ地ニ発シ十間余ノ石筧ヲ経テ浴室ニ通ス温度低キヲ以テ温メテ之ニ浴ス道路ハ各地ニ通スルト雖皆便ヲ得難シ」という状況で、浴客は1年間に平均約1,700人を数えていた。

明治中期の『勝境名区遊覧案内』⁸⁾には上記した4温泉は記載されておらず、新たに千倉鉱泉について「鉱泉は岡瀬川の岸に湧出し其性質は塩類泉に属し医治効用は療癩性皮膚病、消化器病、呼吸器病、慢性腸加答兒、咽喉加答兒、肋膜炎、滲出物、子宮病等にて之を沸かして入浴に供する」とあり、温泉の効能が特記されている。同案内書には内房の岩井海岸について「小湾の内波穏やかにして湖水澄めるを以て海水浴には最も適當の處なるに近年鉱泉湧出して温浴場を設けし為め温泉と海水浴を兼ねたる一挙兩得の地となりぬ」と記され、当時高崎鉱泉と名付けられていて3軒の温泉旅館があり、皮膚病・痔疾・リウマチに効能があったことが分かる。

養老温泉については、1912（大正元）年に個人の宅地から天然ガスが噴出、2年後には井戸から鉱泉が湧出したので天然ガスで沸かしたのが温泉開発の始まりであるという⁹⁾。しかし、1923年の内務省衛生局の調査¹⁰⁾によると、養老温泉の記載はなく、千倉温泉・青堀ラジウム鉱泉・木更津ラジウム鉱泉・元名湯鉱泉（保田村）・横山冷鉱泉（那古町）・高崎鉱泉・成東鉱泉が取り上げられており、平均1年間の浴客数は木更津ラジウム鉱泉で6万4,000人、青堀ラジウム鉱泉で3万2,000人にのぼっていた。木更津では木更津ラジウム株式会社が、青堀では下宿営業の個人が井戸から湧出する鉱泉を利用して共同浴場を建設し、宿泊客や日帰り客に温泉を提供していたのである。

また、1928（昭和3）年の鉄道省『温泉案内』¹¹⁾の青堀鉱泉の項に、「湯は1分間に約1石5斗を噴出し、之を引用して百六十坪の大プールを作っている」とあり、青堀温泉は昭和戦前期の日本の主要温泉地に選定されており、大都市近郊の立地条件を活かして浴客数は12万9,000人におよんでいた¹²⁾。

(2) 第2次世界大戦後

第2次世界大戦後、1950年代中期（昭和30年代）に入ると経済成長を背景に千葉県でも温泉掘削が増え始めた。1954年に東京の会社が習志野市に鷺沼温泉を開発したのを始め、当時の船橋市・野田市・

大原町・大多喜町・天津小湊町・鴨川市・千倉町・白浜町・館山市・富山町・富津市など、主に南房総地域で温泉掘削が許可された。

1955年に開園した船橋ヘルスセンターは、船橋駅に近い約40haの敷地を有する大規模な温泉レジャーセンターであった。開園の3年ほど前に朝日土地興行(株)がガス採掘のために掘削した際に大量の温泉が湧出し、これを利用して総合温泉レジャーセンターを造成したのであった。円形の大ローマ風呂を中心に岩風呂・家族風呂・蒸し風呂・トルコ風呂・電気風呂など大小20の浴場、屋外には遊園地があり、東京湾岸では潮干狩りも出来た。さらに、小型機による遊覧飛行も行なわれていた。1970年の厚生省(現環境省)温泉統計¹³⁾では宿泊客数は4.9万人であり、千葉県観光課資料¹⁴⁾では300万人を超える日帰り客を集めていた。しかし、1971年に地盤沈下防止のために温泉の汲み上げは禁止されて1977年に幕を閉じたが、その跡地は郊外型ショッピングモールの「ららぽーと」として生まれ変わった。一方、1970年には富津市当局が地域振興のために温泉を掘り、各旅館に配湯して金谷温泉郷が誕生した。

高度経済成長期の真っ只中の1970年当時、日本交通公社の『全国温泉案内1300湯』¹⁵⁾に掲載されていた千葉県の温泉は15カ所、温泉旅館総数は38軒であった。温泉の温度は大利根温泉の42℃、あさひ温泉の27℃を除いて、いずれも25℃未満の冷鉱泉であり、30℃以下の温泉地ではすべて加熱を要していた。そして、療養温泉は曾呂温泉、観光と療養の性格を合わせ持っていた温泉は大利根・茂原・木更津・青堀・養老・亀山などであり、観光温泉はあさひ・東金・佐貫・岩婦・高崎・浜田・弁天・千倉などの温泉地であった。

しかし、1970年の厚生省温泉統計によると、温泉案内書掲載温泉の約2倍に相当する34カ所の温泉地があり、枯渇5カ所、未利用5カ所を除く36源泉中32カ所は25℃未満の冷鉱泉であり、湧出量は毎分3,650ℓであった。それが1999年では、温泉地は63カ所、源泉は96カ所へと増加したものの、25℃未満は相変わらず79カ所と多かった。毎分の湧出量は9,307ℓで大幅に増加しており、温泉宿泊施設数は95を数えた。温泉利用客数は1976年の47万人(宿泊客17万人、日帰り客30万人)から1999年の225万人(宿泊客133万人、日帰り客92万人)へと増え、温泉開発がいかに顕著であったかを物語っている(表2)¹⁶⁾。

特に、温泉宿泊施設が質・量ともに拡大し、さらに日帰り温泉施設(温泉公衆浴場)が多数新設されて観光業の発展が著しい。表2から1977年と2007年の30年間の比較をみると、源泉数で3倍、温泉湧出量で3.8倍、宿泊施設数は2.7倍、収容定員は10.8倍、宿泊客数では実に16.2倍の増加を示しているのである。このことは、単位温泉湧出量当たり温泉利用客数が多くなっていること、または温泉利用者1人あたりの温泉量が少なくなっていること、すなわち温泉の過度利用が進んでいることを意味している。

表 2 千葉県温泉資源と温泉利用の変化（1970～2007年）

年次	温泉 地数	源泉数 利用率 %	湧出量 ℓ/min	自噴率 %	宿泊 施設	収容人員 人	宿泊客数 稼働率 万人 %	公衆 浴場	温泉資 源指数
1970	29	41 88	3650		40	2767	16.3 16.2		1.32
1977	36	51 92	3168	18.4	58	3296	14.6 12.2	4	0.96
1987	37	66 77	3994	22.5	55	3561	16.2 12.4	6	1.12
1997	37	110 65	8992	9.6	83	11337	100.6 24.3	28	0.79
2007	86	151 96	12114	17.1	156	35607	236.8 18.2	138	0.34
2007*	131	605 66	92440	36.0	296	27712	209.0 20.7	208	3.34
2007+	3157	28154 68	2777894	29.6	15024	1431504	13708.9 26.2	7748	1.94

（注）環境省の資料により筆者作成。参考として*は秋田県、+は全国を掲載した。その他は千葉県
温泉資源指数：宿泊施設収容定員あたり毎分温泉湧出量。

一方、日帰り客数は1999年には147万人であったが、2005年には518万人を数え、3.5倍の増加をみた¹⁷⁾。1998～1999年の2年間のみで10ヵ所の温泉地が開発され、例えば、長柄町福祉センターに日帰り温泉施設がオープンし、野田市や柏市には40℃を超える高温の温泉が湧出して大規模な温泉施設が開設され、南房総では白浜町にジャングルパレス温泉施設、勝浦市や鴨川市でも多様な日帰り温泉浴場を併設した宿泊施設が増えたのである¹⁸⁾。

4 温泉地の地域的展開

（1）温泉資源の分布

千葉県の温泉は、上総丘陵から南房総地域一帯にかけて集中している。特に養老溪谷沿いを始め、小櫃川・小糸川上流域などに点在して温泉が湧き、内房から外房の海岸に分布している。館山市の外房海岸や旧白浜町・旧千倉町の太平洋岸は南房総の観光中心地域でもあり、温泉開発への投資が活発であった。同様に、鴨川市・旧天津小湊町・勝浦市・御宿町と続く海岸にも温泉地が多く立地するようになった。一方、北総地域では地下1,000mを超える大深度掘削による温泉開発が進行し、温度が比較的高い温泉が大量に利用されている。

掘削深度および泉質・温度を指標としてみると¹⁹⁾、東葛飾地域の野田市・柏市においては、1,000m以上深く掘る大深度掘削によって温度が42～47℃の有力な温泉を得ている。この点は、鴨川や勝浦では大深度掘削であっても温度が25℃を若干上回る程度であるのと比べて、加熱の経費が軽減されるので経営的に有利である。

南房総や九十九里地域では、温泉の掘削深度が浅くて100m未満も多いのであるが、温度25℃未満の冷鉱泉がほとんどであり、比較的少ない湧出量とあいまって、近年まで温泉経営への取り組みが弱かった。これに対して、北総地域では、大深度掘削によって湧き出た温泉は比較的高温であり、しか

も温泉湧出量は多いので、大都市郊外にあって日帰り温泉施設を開設する好条件に恵まれていたのである。

千葉県全体では、泉質はナトリウム塩化物泉（食塩泉）が61%を占めており、以下炭酸水素塩泉（重曹泉）15%、硫黄泉13%と続く。ナトリウム塩化物泉は県域全体に分布しており、炭酸水素塩泉や硫黄泉は県南地域に集中している。神経痛・筋肉痛・関節痛・慢性消化器病・疲労回復・健康増進などの温泉一般の適応症のほか、ナトリウム塩化物泉・炭酸水素塩泉・硫黄泉は慢性皮膚病・きりきずなどに良いと言われ²⁰⁾、さらに炭酸水素塩泉は美肌の湯と称されるほどで、温泉保養を兼ねた入浴を楽しめる。

（2）温泉地の地域的特性

千葉県の温泉地は、かつてはその多くが1～数軒の宿があるに過ぎなかったが、近年では温泉開発が進んで白浜・鴨川・小湊・白子・養老溪谷などは温泉郷を形成するにいたっている。ここでは、温泉施設の利用状況を踏まえつつ、温泉地の地域的特性をまとめてみよう。図1は2005年度の宿泊客・日帰り客別に温泉地利用客数を示したものである²¹⁾。図から、千葉県南部では宿泊型温泉地、北部では日帰り型温泉地が多いという地域的特性が明らかである。

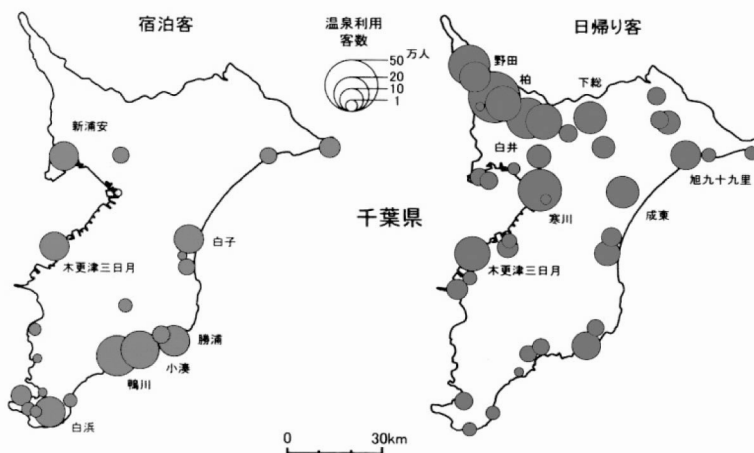


図1 千葉県における宿泊・日帰り別温泉地利用者の分布（2005年）

（注）千葉県の資料により筆者作成。

1994年と2005年の11年間の変化をみると²²⁾、宿泊客数は145万人から219万人へ、日帰り客数は113万人から518万人へ、それぞれ1.5倍、4.6倍へと増加した。宿泊客数の増加に比べ、日帰り客が著しい伸びを示している。

温泉地は、本来的には宿泊客が数日間滞在をして、療養・保養や観光に資する場であったが、今日では日帰りの温泉利用が活発化しており、観光客の志向性が大きく変化している。このことは、その背後に日帰り観光客の受け皿として都市近郊に温泉施設が新設され、温泉旅館が温泉浴場を開放したり、高速自動車の整備などの観光環境が整ったからにほかならない。

以下に、前稿で紹介した日帰り温泉施設²³⁾を中心に、最近の資料を加えて日帰り温泉地の実態を述べよう。

1998年(平成10)年7月にオープンした野田市の東武スパ・リゾート野田潮の湯(野田花井温泉)は、1,500名収容のスケールを誇る施設であり、露天風呂を始め各種温泉浴を経験できるとともに、水着を着けるバーデゾーンでは男女共浴であるので家族連れで楽しめるので、開設当初の年間利用者は千葉県最大の約16万人にも達した。1,300mの掘削をして47℃の高温のナトリウム塩化物泉を湧出させ、湯量も毎分330ℓと著しく多い。1998年当時の利用料金はレンタルタオル付で2,250円であり、その他の温泉施設に比べて高かったが、新しいことと大都市圏の観光市場に支えられて多くの浴客を集めた。しかし、近接地域に競合する温泉施設も多くなり、2004年にリニューアルして水着着用ゾーンは廃止し、利用料金も800円(土休日900円)に下げたので、2005年の利用客数は19万人を維持している。同じ野田市にある七光台温泉は2004年にオープンし、毎分581ℓものナトリウム塩化物泉を使ったユニークな露天風呂もあり²⁴⁾、利用料金が600円(土休日700円)と安く、33万人の利用があった。

東葛飾地域の柏天然温泉白金の湯は、地盤沈下防止のために温泉掘削規制が厳しい都内の銭湯が柏市へ進出し、1,200mの掘削をして42℃の高温のナトリウム塩化物泉を得、各種浴槽を設置した日帰り温泉施設を1999年10月にオープンした。柏駅から徒歩10分という立地条件に恵まれ、しかも入浴料金は700円と安いので28万人の利用者数を数えた。

このような民間資本が開発した新しい温泉地のうち、千葉県南部の銚子市・白子町・大多喜町・御宿町・勝浦市・鴨川市・南房総市(旧千倉町・旧白浜町)・館山市・富津市などの大都市から比較的遠隔の各地では、スパマリン銚子やクアライフ御宿のような日帰りのみの温泉施設もあるが、多くは旅館・ホテルに温泉施設が設置されたものである。銚子の潮の湯温泉犬吠埼ホテル・白子温泉リゾート・養老溪谷温泉滝見苑・勝浦外房の湯・湯場の原温泉勝浦パークランド・ホテル三日月(勝浦・小湊)・鴨川温泉の鴨川館やユニバーサルホテル、千倉海岸温泉スパパラダイス夢みさき・南房総白浜温泉ジャングルパレス・館山市安房自然村内の不老山薬師温泉などのように、日帰り客と宿泊客の両者、あるいは宿泊客のみを対象として宿泊施設が多様な浴槽を持つ温泉浴場を充実し、経営の向上を図ってきた。

犬吠埼潮の湯温泉の場合、犬吠埼観光ホテルが1993年頃から海水を使って潮湯の露天風呂を設けて近隣の地域住民に銭湯のように利用させていたが、温泉ボーリング会社の誘いがあった1997年に1億数千万円をかけて1,066mの掘削をし、温度は25℃を超え、毎分470ℓもの有力なナトリウム塩化物泉を確保したのである²⁵⁾。このホテルは年間宿泊客1万6,000人に対して、その約6分の1にあたる2,600人ほどの日帰り客を入浴料1,200円で受け入れており、さらに個室、浴衣付で昼食コース(料金4,000円より、利用時間11:00~15:00)または夕食コース(5,000円より、15:30~20:30)で利用できる日帰り温泉利用システムも取り入れていた。2005年現在では、宿泊客数は2万人、日帰り客は1.3万人でいずれも増加しており、特に日帰り客の増加は著しい。

勝浦市の勝浦パークランドは、すでに1963年に温泉を開発して炭酸水素塩泉の冷鉱泉を得、湯治

を目的とした老人客相手の温泉旅館として稼働していた。しかし 1986 年、時代の流れに対応して関東地方では東京の平和島に次いで 2 番目にあたるといふ千葉県唯一の本格的なクアハウスをオープンした。日本健康開発財団の指導のもとに健康志向の温泉浴場を新設し、老人クラブの客とともに 2~3 人連れの OL や学生などの若い客、家族連れの客が増えた。この温泉施設は 1994 年に 6 階建て新館を建てたので²⁶⁾、特に休日や夏休み・春休みなどに多くの客が集まり、入浴料は 1,800 円であったが、1999 年には宿泊客は 3.9 万人、日帰り客は 4 万人にのぼった²⁷⁾。しかし、2003 年には廃業し、2007 年 7 月に経営が変わって再開したものの、1 年後には再び閉鎖に追い込まれた。

勝浦が発祥のホテル三日月は、勝浦・小湊に大規模な宿泊施設を開業するとともに、日帰り温泉施設を併設した。さらに 2000 年 7 月には木更津市金田海岸の約 10ha の土地に日帰り客を対象とした温泉施設スパ三日月を開設し、地下 800m から 26℃ のナトリウム塩化物泉を毎分 260ℓ 湧出させ²⁸⁾、各種の屋内外の温泉浴施設に利用している。その 2 年後には、富士山を眺望できる 10 階建て 260 室全室オーシャンビューの龍宮城ホテル三日月がオープンし、一大レジャー温泉地が形成されたのである。東京湾アクアラインの木更津金田 IC から自家用車で 5 分、木更津駅から送迎バスで 20 分に位置し、立地環境は申し分ないと言えよう。日帰り入浴料は 1,890 円（土休日 2,625 円）であるが、各種温泉浴場と健康増進施設やグランドゴルフ場などもあり、多様な客に対応している。特に、勝浦・鴨川（小湊）・木更津の 3 つのホテルには、1 億 5,000 万円という 18K50kg の金無垢の黄金風呂が無料で体験でき、評判を呼んでいる。ホテル三日月グループの勝浦・鴨川・木更津 3 ヵ所における 2005 年の温泉利用者数は、宿泊客では各 15 万人、14 万人、17 万人であり、日帰り客では勝浦 11 万人、木更津 28 万人であった²⁹⁾。千葉県の温泉観光におけるホテル三日月グループの地位は大きい。

一方、市町村が福祉政策の一環として温泉施設を整備しているところや、公共の宿に併設した温泉施設も多い。旧飯岡町では行政当局による温泉開発が進められ、炭酸水素塩泉の福祉センターや国民宿舎飯岡荘、旭市では旭九十九里温泉簡易保険保養センター、白子町では白子アクア健康センター、長柄町ながら温泉では福祉センター、勝浦市では簡易保険保養センター、鴨川市では金山温泉福祉センターや江見温泉老人憩いの家、君津市では人見温泉神門コミュニティセンターや小糸川温泉老人福祉センターなどが整備された。こうした福祉センターでは、年間約 1 万人以上の日帰り客を吸収していた。

勝浦簡易保険保養センターは 1997 年、高台にあるために 1,500m もの大深度掘削をして 26℃、毎分 187ℓ のナトリウム塩化物泉を湧出させた。宿泊料金は 1 泊 2 食付で 1 万円弱と格安であり、2005 年に宿泊客 3.5 万人、日帰り客 4.5 万人を稼働した。旭市でも 1,500m の掘削によって 32℃、毎分 210ℓ の豊富なナトリウム塩化物泉を確保し、1999 年 3 月に簡易保険保養センターを設立した。特に、旭九十九里温泉簡易保険保養センターでは 2005 年に宿泊客 5.4 万人、日帰り客 18 万人を集め、白子アクア健康センターでは、入浴料 1,800 円で温泉入浴・砂風呂・プールが楽しめることもあって、日帰り客数は 6 万人に達している³⁰⁾。

養老溪谷温泉郷は山の湯としての雰囲気があり、溪谷美（特に秋の紅葉）や黒湯という温泉に特色があるが、この地域にはゴルフ場が多いので、日帰り温泉施設やゴルフ場併設の温泉施設での利用も

ある。さらに、ほかの地域からタンクローリーで温泉を運び、温泉地となった例として、千葉対島温泉（伊東温泉より搬送）、銚子養護老人施設（スパマリン銚子源泉）、東金温泉（常磐湯本温泉）、富里町福祉センター（大田原温泉）、小湊温泉（旧天津小湊町内源泉）、鴨川温泉郷（鴨川市内源泉）などである。

なお、温泉施設を客に開放するのではないが、マンション業者が佐倉市稲荷台で温泉を掘削したところ、900mの深度から24℃の塩化物泉が毎分100ℓも湧出し、温泉付マンションとして158戸が分譲される予定であるとの報道もあった³¹⁾。

（3）鴨川市における温泉地の展開

鴨川市は2005年2月に天津小湊町と合併し、南房総の観光都市としてさらなる発展を期すことになった。以下に、鴨川市内における小湊温泉・鴨川温泉郷の形成の経緯について述べる。

1) 小湊温泉

旧天津小湊町の中心集落は日蓮上人誕生の地として知られ、大本山の誕生寺や天然記念物の鯛の浦などの観光ポイントがあり、門前町を形成している。50年ほど前に、小湊の7軒の旅館が共同で町内の内浦地区で温泉を掘削し、6kmのパイプラインを敷設して引湯し、小湊は温泉地となった³²⁾。この温泉利用は10数年間続いたが、パイプラインの老朽化に伴う費用負担に耐えられず、廃止を余儀なくされたという。

その後、小湊ではホテル三日月が1995年頃にナトリウム塩化物泉を開湯し、豊明殿・中屋旅館も湯量豊富な温泉を掘削して温泉旅館となった。こうした動きに刺激されて、2003年に小湊の旅館4軒が共同でかつて掘削し廃止されていた温泉を改めて掘削し、この温泉を搬送して利用することになった。この「満願の湯」は毎分38ℓのメタケイ酸・メタホウ酸の温泉である。2007年に新たに1軒の旅館が加入して、小湊では現在8軒の温泉旅館・ホテルが営業している。

小湊温泉組合は温泉の告知看板を国道沿いに3基設置し、旅行雑誌にも広告を出して小湊温泉を知ってもらうために努力を続けている。小湊地区に隣接する天津地区でも、各施設が独自に温泉を開発して利用客が増えている。

2) 鴨川温泉郷

鴨川市の嶺岡山系を構成する山間地には、曾呂温泉・粟斗温泉などの1軒宿の温泉が点在しており、房総の秘湯として一部の温泉客に知られていた。今日では両温泉は静かな山の湯として、さらに同じ硫黄泉でありながら、曾呂温泉は腐食物のために茶褐色の湯、粟斗温泉は透明な湯としての特性が知られることになり、鴨川市民や都会からの観光客も来訪している³³⁾。

一方、鴨川の前原海岸は外房の海水浴場として知名度が高く、北に続く東条海岸は波が荒いために遊泳禁止となっているものの、一帯には見事な松の防風・防潮林が続いてすぐれた景観地域を形成している。東条海岸には南房総最大の観光施設といえる鴨川シーワールドを核として高級旅館・ホテルが集まっていて、鴨川観光の中心地域を形成してきたが、各施設には温泉浴場はなかった。

そこで1998年、有力旅館の鴨川館が1,300mの大深度掘削によって毎分49ℓのナトリウム塩化物

泉を湧出させ、これを利用して和風を基調にした高品質の温泉大浴場や露天風呂などを新設した。前原海岸の鴨川ユニバースホテルも自家源泉を掘削し、また鴨川市街の南に隣接した太海漁村でも、1 民宿が自家源泉を掘って太海湯元温泉として利用していた。

こうした中で、温泉を持たない多数の旅館経営者は温泉確保の願いが一層強まり、2003 年に近くの嶺岡山系金山川上流の打墨地区字斧落に自噴する温泉を共同で開発し、タンクローリーで約 10 km 離れた鴨川の観光地域へ搬送して新たに 17 軒の温泉旅館が誕生したのである³⁴⁾。そして、このときに“鴨川温泉宣言”をして、鴨川温泉郷としての一体感を醸成したのであった。この「なぎさの湯」の泉質は、ナトリウム塩化物泉が多い千葉県にあってユニークな単純硫黄冷鉱泉であり、15℃の冷鉱泉を経 50 mm の引湯パイプで 2 km ほど離れた貯湯槽まで運び、さらにタンクローリーで各旅館に配送している。

新温泉開発以前から、打墨地区には川や沢のあちこちに白い湯花の湧水があり、地元民は様々な形でこれを利用していたが、鴨川観光協会の温泉開発の申し入れに対し、源泉地を管理している打墨入会山林管理組合は、鴨川観光の発展に理解を示して源泉地の貸与を許可したのであった³⁵⁾。

こうして、なぎさの湯の搬送によって鴨川市街の旅館 10 軒、太海地区の旅館 7 軒に温泉浴場が整備され、曾呂・栗斗温泉も含めた鴨川温泉郷が形成されたのである。当時の旅館組合長の回想³⁶⁾には、「東京での温泉イベントにも積極的に参加したが、私たちが最も重要であると思っていたのが、地元の認識であった。関係者が「鴨川は温泉地である」と主張しても、実際に居住している住民にその認識がない限り成功はしないと考えていた。そこで、移動式足湯の設備を設けて地元のイベントに稼働させたり、地元のガソリンスタンド、飲食店等に温泉宣言のパンフレットを置かせて頂いたり、地元のタクシーには温泉宣言のステッカーを貼ってもらったり、地元重視の PR 作戦を展開致した。旅行業者も鴨川が温泉宣言をしたことを題材として扱ってくれ、送客が始まった。このようにして始まった温泉宣言ではあるが、多くの人たちが温泉という命題に基づき、一つとなって実現したものと理解している。」とある。

5 千葉県における温泉地の課題と振興策

(1) 千葉県全域

1) 課題

以上のような千葉県の温泉地の発達と現状を踏まえて、温泉地が抱えている課題についてまとめることにしたい³⁷⁾。

千葉県の温泉地は、温泉資源からみると全国的にも低位に位置づけられている。この現状を十分に認識した上で今後の振興策を図ることが重要である。東京大都市圏に近接している立地上の有利さから、近年日帰り温泉施設が増えるとともに、宿泊施設でも露天風呂を始めとして温泉の有無が問われるようになったが、多額の経費を投入して温泉を深く掘っても、東葛飾地域を除いてはおおむね低温の冷鉱泉でかつ湧出量も少なく、加熱・循環などの維持費がかかり経営を圧迫することになるのであ

る。

新しい温泉施設は、いずれも露天風呂・大浴場・ジャグジー浴槽・気泡浴槽・打たせ湯・サウナ室・ミスト浴室などが設置された画一的な温泉浴場施設である。一方、温泉ではなくても同様の浴場施設を備えたスーパー銭湯も数多く成立しており、温泉施設との差別化が明瞭ではなくなっている。とはいえ、温泉客にとって温泉資源の存在は大きいので、療養・保養客に対しては泉質を最大限に活かす工夫をするとともに、地域の自然環境や運動・食事療法などを取り込んだ総合的な温泉療法や温泉地開発の方策が考えられねばならない。正しい温泉入浴法を客に提示し、心身ともにリラックスできるような温泉地環境を整備することが重要である。

養老溪谷と白子地区・金谷地区を除いて、勝浦・千倉・白浜などでは、個々の宿泊施設がそれぞれに温泉地名をつける例が見られ、観光客に混乱を与えて易い。これらの地域では、地名をかぶせた温泉郷として統一を図ることが望まれる。白浜では安房白浜温泉郷として温泉地域としての一体感を持ち、共同での宣伝活動や地域の環境整備にあたるべきであろう。

千葉県では、主に南房総地域で観光的温泉地開発が展開されているが、この地域は千葉県最大の観光地域である。海と山の自然環境にすぐれ、素朴な農山漁村景観が多く残されている。そこで、単に温泉施設を目的とするだけでなく、これらの観光ポイントを巡る広域観光ルート上の拠点として温泉施設を位置付けて、その利用促進を図ることが大切である。また、その際に泉質や温泉の色の異なる温泉地を結び付けたり、ユニークな温泉施設を取り込んで変化を持たせ、観光客の宿泊数や地域内での滞留時間を増やして、地域経済的にも効果が上がるような振興策を考えることである。

温泉地での滞在については、高齢者をはじめとして広く各年齢層にとっても志向性は強まっているが、その具体的メニューが提示されていないことは問題である。

日本温泉協会の国民保養温泉地宿泊客調査³⁸⁾によると、温泉地での滞在日数は高齢化するほど増加し、3泊以上は60代33%、70代55%、80代75%となり、これに対応して高齢者のリピーターが増えている。宿泊客の評価で「大変良い」の割合は、温泉資源74%、ストレス解消・自然環境が各62%と高率であり、温泉情緒・医療効果・料理も各40%台であった。温泉療養効果を期待しているのは、腰痛などの61%が著しく多く、神経系・糖尿病・リハビリ・リウマチなどは各10%台であった。全般的に、温泉による身体への効果は「良くなった」が41%、「少し良くなった」が36%を示し、77%が何らかの改善がみられたのである。そこで、千葉県の温泉地の中から、国民保養温泉地の指定を受けるような前向きの動きが出て良いと考えられる³⁹⁾。

そして、何よりも大切なことは観光客に対して温泉地の人々が心から迎えるホスピタリティの醸成であり、各温泉地で退職者や時間に余裕のある人々のボランティア活動のなかで徒歩での地域案内が行われれば、地域理解が進むとともに観光客と地域住民との交流が芽生えることにもなって、持続可能な温泉地域の形成につながるようになるのである。

2) 振興策

千葉県の今後の温泉地振興策にとって大切な点は、温泉地の地域的特性を最大限に活かすことである。都市地域にある日帰り温泉地はこれまでの形態を維持することにし、上総丘陵地域や九十九里・

南房総地域の温泉地は、その山地・海岸・農漁村などの地域景観を活かして温泉資源と景観の組み合わせを考慮し、滞在日数を増やすようなメニューを考案すべきである。

特に、近年の温泉医学で強調されていることは、森林浴や傾斜地での適度の散策をする地形療法、そして海水に浸かったり、潮風にあたりながら砂浜海岸を歩いたりする海洋療法（タラソテラピー）などの環境療法と温泉療法を組み合わせ、人々の健康づくりに資することである⁴⁰。まさに、予防医学的な視点から安定した高齢化社会の構築を考えることが、温泉地域に課せられていると言えよう。

ここで、温泉の泉質・湧出量の特性を踏まえたうえで、地域特有の郷土景観や歴史文化・地場産業などを取り込んだ滞在型メニューを例示しよう。このメニューは、イベント的に行なうものではなく、1年中訪問客数に関係なく常に催行されるものでなければ、その文化的・教育的・経済的効果は低いものになるであろう。

以下は、千葉市からの客を受け入れる際、日帰り温泉浴客の増加を期待するだけではなくて1泊させるA案（1泊2日）、1泊宿泊客を2泊させるB案（2泊3日）である。いずれも短期滞在客の増加を図る案であるが、とりあえず、日帰り型から宿泊滞在型温泉地への振興を図ることが重要である。その際、ボランティアガイドによる徒歩を中心とした地域案内⁴¹が不可欠である。そして、ガイドに欠かせない地図は、スケールが正確なものを作成する必要がある。なお、訪問観光地間の距離が離れている場合は、観光地をめぐる2次交通として、観光協会などの団体主導のもとに各宿泊施設持ち回りでマイクロバスなどの提供をすると良いであろう。

養老温泉

- A：①千葉市—養老溪谷散策（ガイド付き、溪谷・栗又の滝の地形や植生など自然観察をする。）—宿泊施設で温泉浴
- ②大多喜城・城下町散策（ガイド付き、近世期大多喜の歴史散歩をする中で、大多喜城総南博物館・栗草園・天然ガス発祥碑・徳川四天王の本多忠勝と忠朝父子の墓がある良玄寺・国指定重要文化財の渡辺家住宅などをめぐる。）—温泉浴—帰着。
- B：Aに加え、2泊目宿泊 ③春には大多喜たけのこ狩りやレンゲの里めぐり、その他の時期は農村地域めぐりや県民の森の散策をする（ガイド付き）。—温泉浴—帰着。

白子温泉

- A：①千葉市—茂原の散策（ガイド付き、日蓮宗の東の身延と言われる藻原寺と隣接する桜の名所茂原公園、および「ひめはるの里：ヒメハルゼミ生息地・花ショウブ園など」で歴史と四季折々の自然景観を楽しむ。）—白子町の九十九里浜へ行き、アクア健康センターで砂風呂などに入浴—宿泊施設で温泉浴 ②九十九里浜めぐり（ガイド付き、近世期の地引網漁業と納屋集落の歴史をたどる中で、近畿地方からの漁民の移住や親村・子村・新田開発などを実地に学ぶ。南白亀川河口近くの地引網発祥地記念碑や青海苔養殖地を見学する。）—温泉浴—帰着。
- B：Aに加え、2日目宿泊 ③テニス民宿地域での各種運動や砂浜を歩いて健康づくりをする（ガイド付き）。—温泉浴—帰着。

白浜温泉郷

- A：①千葉市—内房の鋸南・富浦・館山などの観光ポイントに立ち寄る。—野島崎の海岸めぐり(ガイド付き、1703(元禄 16)年の大地震で海底が隆起し、野島と陸地が繋がった岩礁の地形をめぐりながら、厳島神社・灯台・海洋美術館・海女小屋などを見学する。)—宿泊施設で温泉浴
- ②冬季には近くの露地の花畑を歩き、里見氏初代義実が創建した杖珠院を訪ね、義実の木像や里見氏の墓に詣でる。少し離れた南房総最大の露地の花畑である旧千倉町白間津を散策し、料理の神様を祀る高家神社や水産試験場を訪ねる(ガイド付き)—温泉浴—帰着。
- B：Aに加え、2日目宿泊 ③千倉・和田浦・鴨川方面へ向かい、ローズマリー公園・太海フラワーセンター・仁右衛門島などを訪ね、適宜千倉温泉・太海温泉・鴨川温泉などで温泉浴—帰着。

(2) 鴨川市

1) 課題

鴨川市の小湊温泉と鴨川温泉郷は、ともに温泉地となって観光客の期待感のもとに宿泊客が増え、入湯税が市の財政を潤すことにもなったが、滞在客にとっては温泉地として環境整備が進んでいるとは言いがたい点は問題である。

小湊温泉では、誕生寺門前町の町並み景観の保全が急務である。土産店・駐車場・遊覧船発着場など、小湊の観光客が集まる中心地域が未整備である。個々バラバラの看板や建物外壁の色彩の統一を図り、門前町にふさわしい落ち着いた町並みを再生することである。

鴨川温泉郷でも、特に鴨川駅周辺の町並みを整備する必要がある。特に、海浜観光地としての駅前の雰囲気づくりと駅前から海岸へいたる道を遊歩道的に整備して、観光空間とすることである。沿道の商店の協力も必要となるが、まず行政の主導性を期待したい。東条海岸の松林の空間はすぐれているが、一帯は単なる観光施設へ行くために利用されており、観光客が散策をする遊歩道も整備されていない。

太海漁村はいわゆる外房の磯浜の景観を残し、源頼朝伝説のある名勝仁右衛門島もあり、多くの旅館には搬送したなぎさの湯が使われていて、温泉浴が楽しめるようになっている。しかし、漁村特有の入り組んだ狭い道路は、一面では伝統的な漁村の景観を今に残っていて評価されるが、車社会の現在、駐車場の確保と運営は再考する必要がある。

特に、フラワーセンター前の駐車場は前面の岩礁海岸美を遮断しているし、漁村中央部の駐車場も分かりにくい。また、磯の岩石海岸の北には砂浜海岸が続いているものの、活用はなされていない点は今後の課題であろう。

2) 振興策

小湊温泉では、鴨川との合併を機に地域の特性を次のように把握し、その活用を意図している。温泉組合長の方針として、「まず鴨川市の観光素材としての特徴は、①海がある、②里山がある、③神社仏閣の古い歴史がある、④気候が温暖で、食材が豊富で美味しい、⑤そして何よりも首都圏の消費人口を取り込めるマーケットが存在する、⑥さらに、健康にはかかせない総合病院があり、滞在する観光客が安心出来ることなどが指摘される。当地の温泉は、これらの要素を取り込み、地域と密着した、

癒しの滞在型温泉保養リゾートを目標としたい。」⁴²⁾と抱負を述べている。

鴨川温泉郷の振興策も同様であり、地域の多様な特性を組み合わせ、幅広い客層にきめ細かな対応をして顧客満足度を高めることである。まず、なぎさの湯を利用して規模は小さくても地域のシンボルとなるような和風共同浴場を新設し、観光客が地域内を散策するように配慮することが肝要である。東条海岸では松林の散歩道の一角、太海地区では仁右衛門島や漁村の浜辺を見下ろす場所が適地となるであろう。散策客が増えて地域がにぎわい、客は非日常的な防潮林やエビ刺網・ハバナリの乾燥風景などにも触れて心が和むのである。

また、幸いなことに鴨川温泉郷ではナトリウム塩化物泉・硫黄泉・炭酸水素塩泉など泉質の異なる温泉が存在しており、曾呂温泉や粟斗温泉などの素朴な1軒宿も存在する。健康志向の強い中高年層のみならず、若年層にとっても近年温泉にストレス解消を求めており、その効用が検証されている⁴³⁾。これらの温泉をめぐる際に、地域の四季折々の自然環境や歴史・文化景観などを解説するガイドを養成することも欠かせない。今すぐに実行できることとして、大山千枚田・不動尊・畑農村・仁右衛門島・太海漁村・天津漁村・誕生寺・鯛の浦・清澄寺などを組み合わせ、温泉入浴体験を加えたガイド付きのコースを設定し、ウィークデイに2~3泊する滞在客の増加を図ることが温泉観光振興策として重要であると考えます。

以下に、前述した例にならって、千葉市発の滞在型メニュー（A：2泊3日、B：3泊4日）を提示したい。

小湊温泉

- A：①千葉市—房総スカイライン経由—鴨川シーワールド—誕生寺・鯛の浦（小湊鯛のまちボランティアガイド付き、日蓮上人誕生の地としての歴史的ガイドを楽しむ。）—宿泊施設で温泉浴
②清澄寺・麻綿原高原・内浦山県民の森・勝浦海中公園（ガイド付き）—宿泊施設で温泉浴—③みんなみの里体験・大山千枚田・大山不動尊・酪農の里（ガイド付き）—帰着。
B：Aに加え、3日目宿泊 ④小湊温泉で健康志向の温泉浴・自然療法体験—帰着。

鴨川温泉郷

- A：①千葉市—房総スカイライン経由—鴨川シーワールド—みんなみの里・大山千枚田・大山不動尊・酪農の里（ガイド付き）—宿泊施設で温泉浴 ②太海漁村・仁右衛門島・フラワーセンター・畑地区農村景観など（ガイド付き）—宿泊施設で温泉浴 ③勝浦海中公園・御宿・大多喜（養老渓谷で温泉浴）経由、または和田浦・千倉・白浜・富浦・館山（白浜で温泉浴）経由—帰着。
B：Aに加え、3日目宿泊 ④鴨川温泉郷で健康志向の温泉浴・自然療法体験—帰着。

6 むすび

筆者が20年以上も前に温泉志向性を調査した際、温泉地に期待するものは①自然環境、②温泉情緒、③温泉資源の良さの3要素に集約され、この傾向は今日でも変わることはない⁴⁴⁾。温泉地は温泉資源だけではなく、その地域の個性豊かな自然環境や歴史文化、素朴な地域景観などが複合化されて

醸し出す雰囲気の良いことや地域住民のホスピタリティが求められている。温泉旅館がそれぞれの経営理念を追求することは当然であるが、地域を挙げての温泉志向の3要素への取り組みこそが大切である。

まず、千葉県の温泉地の滞在型への展開を図るには、地域の特性を総合的にガイドするボランティアガイドが常駐していることが求められる。ボランティアガイド希望者は、社会貢献としての意義を感じている方々が多いのであるが、観光協会などが交通費・昼食費など最低限の必要経費を補助する姿勢がなければ、ガイドシステムを維持していくことは出来ない。

今日、環境教育が叫ばれ、観光に関してもエコツーリズムに期待感が増している。観光客に対して温泉地と周辺地域の地域理解を深めること重きを置いたガイドを継続的に実施することが、今後の滞在型温泉地復活のひとつの鍵になるものと考えられる。そのために、地域特有の遺産である郷土景観を保全し、これを活かすことが望まれる。まずは、千葉県内の大小の学校グループをはじめ、各県からの学校団体に、野外教育の実践の場としての観光ポイントとその利用メニューを紹介し⁴⁵⁾、機能の整った温泉地に宿泊させて温泉地活性化を図る必要がある。いまひとつは、房総半島の多様な自然環境（山・川・海・植生・気候）と温泉地を組み合わせた健康志向の滞在型温泉地をいち早く形成すべきである。さらに、成田空港で発着する外国人が毎年800万人に達しているにもかかわらず、2007年度の千葉県での延宿泊客数は175万人に過ぎないので、外国人に日本固有の温泉文化を伝え、温泉浴でリフレッシュしていただくことは、日本理解にとって大きな意義を有することにもなる。

現在、全国的に旅行会社主導のもとに、また倒産した大旅館を買収して格安ツアーを催行しているチェーン会社の影響のもとに、多くの大規模温泉旅館が食事中心の1泊型格安観光客の誘致に奔走している。温泉地を構成する観光業者・観光団体・行政・地域の人々は主体性を持ち、一体化したシステムのもとに地域的特性を前面に出して観光客が心から満足するような温泉地域社会を構築⁴⁶⁾するために全力を尽くし、地の利に恵まれた千葉県の温泉地の発展を図るべきであろう。

【注・参考文献】

- 1) 日本観光協会（2008）：『平成19年度観光の実態と志向』日本観光協会、21頁。2007年度では、温泉浴が複数回答で50.3%を示し、以下に自然の風景を見る44.1%、名所・旧跡を見る32.0%が続いている。
- 2) 日本温泉協会・温泉研究会（1995）：『温泉必携 改定第7版』同協会、3～13頁。1948年に公布された温泉法では、源泉における分析結果によって温泉か否かが判定される。
- 3) 山村順次（2000）：千葉県における温泉地の開発とその課題。千葉大学地理学研究報告、11号、1～8頁。
- 4) 5) 環境省温泉統計各年度の資料による。
- 6) 山村順次（2005）：温泉資源性の変化と温泉地経営。温泉地域研究、4号、9～16頁。筆者の名づけた温泉資源指数（宿泊収容定員あたり毎分温泉湧出量）は温泉の適正利用を知る上で重要な指標となる。
- 7) 内務省衛生局（1886）：『日本鉱泉誌中巻』。同局、105～109頁。
- 8) 片山友彦（1902）：『勝境名区遊覧案内』。大倉書店、25、31、37頁。
- 9) 山と溪谷社（1998）：『日本の温泉—東日本編』。同社、184頁。

- 10) 内務省衛生局（1923）：『全國温泉鑛泉ニ關スル調査』。同局、47～48 頁。なお、緒言に「本編ニ掲ゲタル名稱ノ中温浴ノ目的ヲ以テ鑛泉ニ熱ヲ加ヘタルモノニシテ當該地ニ於テ慣習上温泉ト呼稱シ來リタルモノハ其儘ノ名稱ヲ用ヒ・・・」と記している。
- 11) 鉄道省（1928）：『温泉案内』。博文館、383 頁。
- 12) 日本温泉協会（1941）：『温泉大鑑』。同協会、840 頁。
- 13) 平岡千秋（1972）：昭和 44 年度全国温泉利用状況一覧（その 2）。温泉工学会誌、8 巻 2 号、100 頁。
- 14) 千葉県観光課（1970）：『観光統計概要』同課、14 頁。
- 15) 日本交通公社（1970）：『全国温泉案内 1300 湯』。同社、149～151 頁。
- 16) 環境省温泉統計各年度の資料による。
- 17) 山村順次（2007）：温泉資源の観光的利用—山形県と千葉県を例として—。温泉地域研究、8 号、19～24 頁。
千葉県資料。
- 18) 前掲 3)。
- 19) 前掲 3)。
- 20) 千葉県（1998）：『千葉県の温泉』。同県、24 頁。
- 21) 前掲 16)。
- 22) 千葉県資料。
- 23) 前掲 3)。
千葉県資料。
- 24) 鈴木謙二編（2009）『日帰り温泉&スーパー銭湯 2009 首都圏版』ぴあ(株)、53 頁。
- 25) 筆者の聞き取り調査による。
- 26) JTB 編（1999）：『'00 日帰り温泉首都圏』同社、13 頁。
- 27) 前掲 21)。
- 28) 田中英夫編（2007）：『気ままに日帰り湯 関東・甲信越編 2008』。J A F 出版、46 頁。
- 29) 前掲 21)。
鴨川（小湊）の日帰り客数は資料なし。
- 30) 前掲 21)。
- 31) 朝日新聞、2000 年 2 月 11 日付け。
- 32) 吉田安男（2008）：小湊温泉の開発と今後の方向性。日本温泉地域学会第 12 回研究発表大会発表要旨集、29 頁。
- 33) 曾呂温泉は温度 15℃の含重曹硫黄泉であり、温泉湧出量は少ないが心身の癒しに適した貴重な温泉として、朝日新聞 2004 年 4 月 6 日付け、東京新聞 2004 年 9 月 25 日付けなどマスコミでよく取り上げられ、その知名度は上がっている。
- 34) 関係者への聞き取りによれば、これらの設備費用は 3,500 万円にもなり、金策に大変苦勞したとのことであった。
鈴木健史（2008）：鴨川温泉の開湯と課題。日本温泉地域学会第 12 回研究発表大会発表要旨集、21～22 頁。
当時鴨川旅館組合長であった鈴木は以下のように述べている。「当時の新しく温泉を導入しようとする旅館組合員が規模に合わせ、開発費用の一部を負担すると共に、鴨川市に対しては入湯税の税収が増えることを説明し、補助金のお願いをした。その補助金が出るまで待つてはおれないので、組合長、副組合長の 3 名は地元の銀行に繋ぎ融資をお願いし、個人保証をし、融資を受けたのである。」

- 35) 速水伸雄 (2008) : 地域における温泉資源～打墨・金山の湯花から鴨川温泉なぎさの湯へ～。房日新聞、2008年9月9日付け。
- 36) 前掲34)。
- 37) 前掲3) でまとめた課題に最近の動向を加えた。
- 38) 山村順次 (2008) : 国民保養温泉地の地域振興と課題。温泉地域研究、10号、17～28頁。
- 39) 甘露寺泰雄 (2008) : 地域資源である温泉の活用—保養温泉地としての温泉。房日新聞、2008年9月10日付け。
国民保養温泉地は現在見直しが行なわれているが、甘露寺氏は「内陸地域、外房及び内房地域にそれぞれ1ヶ所程度の国民保養温泉地の創設を計画すべきではなかろうか。」と述べているが、筆者も同感である。
- 40) 阿岸祐幸 (2009) : 『温泉と健康』岩波書店、154～186頁。
- 41) 千葉地理学会編 (2000) : 『房総の地域ウォッチング—おもしろ半島千葉県の地理散歩』大明堂、総114頁。
本書で設定した観光ポイントは、徒歩による地域理解と健康づくりを前提とした地域ウォークを考慮したものである。
- 42) 前掲32)。
- 43) 矢島潤平・榊田裕貴 (2007) : 温泉入浴によるストレス緩和効果の検証。温泉地域研究、8号、1～8頁。
- 44) 山村順次 (1998) : 『新版日本の温泉地 その発達・現状とあり方』。日本温泉協会、129～139頁。
- 45) 修学旅行協会は、月刊「教育旅行」を発行しているが、観光地域での体験学習例を数多く掲載している。
- 46) 山村順次編 (2006) : 『観光地域社会の構築』同文館出版、1～23頁。

Regional Development of Spas in Chiba Prefecture – Development, Present Conditions and Promotion Plan –

Junji Yamamura

Abstract

There is no question that Japanese people have a deeply cultural bond with onsen or hot springs and as a result have developed high expectations when visiting them throughout Japan. Today, the onsen and spa treatment experience is the top tourist highlight in many tourist areas all across Japan. Therefore, development of a potential tourist area largely depends on whether or not it has hot spring resources. Another factor is its location to other popular areas.

For some time now, it has been said that, “Chiba is not a hot spring prefecture.” Until now. According to 2005 hot spring resources data, Chiba is in fact a hot spring prefecture, even though the output is only 12,000 liters per minute. However, because of Chiba’s close proximity to Tokyo, Chiba is ranked fairly high nationwide for the number of visitors going to hot springs – coming in at around 2.4 million annually.

Hot spring operators around Tokyo, including Chiba, do well in the late fall and throughout the winter catering to both “day-trippers” and “over-nighters”. Not surprisingly, the further from Tokyo you get the number of “over-nighters” increase, but because of Chiba Prefecture’s close location – within 2 hours from Tokyo – the number of “day-trippers” have increased over the last few years contributing to a boom in trips to onsen. Moreover, it has forced us to look at how development of regional spas in Chiba can be improved and maintained.

The most favorable hot spring locations take into account the following factors: 1.) relationship with the natural environment; 2.) atmosphere of the spa; and 3.) quality of hot spring resources with regard to health and overall wellness. Accordingly, the success and development of the regional spas depend on meeting the high expectations of the Japanese tourist while respecting nature – the mountains, rivers, coastal areas and animals – along with creating an active community that preserves and maintains harmony between the natural environment and the economic incentives that it provides.